

本当の教えに出会うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

無碍の一道 第90号

発行:2023年10月25日
発行者:浄土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺
〒739-0147 住職 天野英昭
東広島市八本松西6丁目10番1号
☎・FAX 082-428-1360

報恩講並びに秋季永代経法座

日時 11月16日(木) 9:00~15:00頃

ご講師 北山 祐章師(福山市沼隈 光源寺住職)

朝席 9:00~11:30

とき
お斎(お食事)は、お弁当を用意致します。

昼席 13:00~15:00



第134回歎異抄輪読会

日時 11月30日(木) 14:00~15:30頃

ご講師 松田正典先生(広島大学名誉教授)

費用 500円

参加者 天龍寺の門信徒の方のみならず、どなたでも参加は自由です。

除夜会並びに元旦会

日時 12月31日(日) 23:30~24:30頃

場所 天龍寺 本堂

磯松天龍寺墓苑からお詫びとお知らせ

- ① 磯松天龍寺墓苑の水道のポンプが故障し、約1週間みなさまにはご迷惑をおかけしましたこと、さらに、井戸水の為に水位が下がり、これまでも度々ご迷惑をおかけいたしますこと重ねて書面をお借りお詫び申し上げます。何卒ご理解をいただければありがたいと存じます。
- ② 磯松天龍寺墓苑の借用区画が、2区画出来ましたのでお知らせ致します。ご希望の方が、いらっしゃるいましたら、天龍寺(082-428-1360)までご連絡をいただければと思っております。

「生死の苦海」をどこまでも流転する存在

還暦を過ぎ6年が経ちました。どれだけ生きても、人生は楽にならないというのが、私なりの実感です。どこまで生きても楽にならない、自分の思い通りにならない人生を何とか少しでも楽にしようと思い通りにしよう、臨終の間際まで、娑婆の縁を去る瞬間まで日々悪戦苦闘しながら生きていくことが、ある意味人として生を受け生きていくことの一部なのかも近頃考えることがあります。

度々申してきましたが、学校を早期退職させていただいて14年が過ぎましたが、幼少期からお世話になった方も含め、どれだけ多くの方々と悲しい別れのご縁をいただいていたかと考えることがあります。

お葬儀の際に拝読させていただきます御文章(本願寺8代門主蓮如上人のお手紙)の白骨章の冒頭は、『それ、人間の浮生なる相を・つらつら観ずるに、おおよそはかなきものは・この世の始

中終・まぼろしのごとくなる一期なり、・・・』と言っておられます。ある意味私たちの一生は、まぼろしのごとく過ぎ去っていくものかともこの年になり思うことがあります。

残念ながら長年連れ添った夫婦であろうが、血を分けた親子・兄弟・家族・親族であろうが、はたまた近隣の方、職場の方も含め、すべての人は、限りのある世界に生を受け、生きているが故に、だれもがいつかどこかで、悲しい別れをしなくてはならない宿命の中で、生きている存在である。この14年間のご縁を通してご指南・ご教授いただいたことでもあります。

また『散る桜、残る桜も散る桜』という句がありますが、残っていてもいつかは散っていかなくてはならないとこの点も14年間のご縁を通して私なりに実感させられたことであります。

さらに、この点も度々申してきましたが、私たちは比較の世界に生きているがゆえに、物心ついた頃から雨が降った、晴れが続いた、雪が降ったと自分の都合で良し悪しを繰り返し、一方で勝った・負けた、得した・損した、役に立った・役に立たなかった、調子が良い・調子が悪いと、ただただ目の前のものに一喜一憂・翻弄されながら生きていかななくてはなりません。

残念ながら自らの残りの人生も同じようなことを繰り返しながら、この娑婆を去っていくのだろうなと漠然と思うことです。ある意味『生きるために生きている。』そのような感覚を覚えることがあります。

人の人生とは、哀しいものかもしれません。このような人生を歩まざるおえない人間の哀しい命の中を生きていく存在だと自らを鑑み考えることです。

しかしながら、親鸞聖人のご和讃に『本願力に遇いぬれば、むなしくすぐる人ぞなき』という句があります。物心ついた頃から変わりなく、日々目の前のものに一喜一憂・翻弄されながら、哀しくもむなしい人生で終わりを迎えようとしている私ですが、全てのご縁を私なりに意味あるもの、仏道への糧にできたらと願うことです。

広島別院清掃奉仕

10月24日(火)、天龍寺仏教婦人会、天龍寺仏教壮年会、有縁の皆様と広島別院へ清掃奉仕に行ってきました。4年ぶりにお参り、ご報謝させて頂きました。お天気にも恵まれ、清々しい汗を流しました。ご輪番を囲んで写真撮影もしました。ありがとうございました。

